台湾新聞資料①

『台湾日日新報』1923(大正12)年

昭和天皇
皇太子時代の台湾訪問

関東大震災

所蔵　財団法人　台湾協会
制作　財団法人　交流協会
監修　河原　功

台湾新聞資料①

解説　河原　功

昭和天皇皇太子時代の台湾訪問

昭和天皇が皇太子であった 1923（大正 12）年 2 月、「皇太子殿下台湾行啓御内定の趣」が総督府に伝達された(「台湾日誌」2 月 20 日)。そして、翌 21 日には「皇太子殿下台湾行啓下検分」として西園寺式部次長、戸田事務官、八田侍医の一行が神戸を出発した。一行は 25 日に台湾に到着、一週間ほどの下検分を終えて 3 月 4 日に因幡丸で帰京の途についた。

総督府では大慌てで歓迎準備に取り掛かる。皇太子を迎えるにあたって、準備万端を整えるにわずか一ヶ月しかないという状態であった。何しろ皇太子の台湾行啓は 4 月 5 日に東京を出発、9 日に基隆上陸という予定であった。

ところが、フランス・パリで北白川宮成久親王が自動車事故で死去した（乗用車運転中に街路樹に衝突、同乗の妃殿下並びに鳩彦王殿下は重傷）ために皇太子の台湾行啓は一時延期となり、台湾総督府としては日程変更によって混乱させられる。

結局皇太子行啓は一週間遅れて、4 月 12 日に横須賀をお召し艦「金剛」(軍艦)で出港、16 日に基隆に入港となった。

皇太子は午後 1 時 25 分に基隆に上陸、基隆駅から列車に乗車して台北駅に到着、宿泊所となる総督官邸までの沿道は奉迎の各団体や一般市民で埋め尽くされた。夜には官民による提灯行列と万歳の声が総督官邸を取り巻いた。

皇太子の台湾行啓は台北のみならず、新竹、台中、台南、高雄、屏東と南下して、さらに澎湖島にまで及んだ。交通不便な台湾東海岸の花蓮港にまでは足を伸ばさなかったものの、行啓はほぼ台湾全島にわたるものであった。当時の交通事情から考えると、行程はハードなものといえよう。そして 27 日午前 7 時 10 分に台北駅を発車、基隆港からお召し艦「金剛」に乗船して帰京の途につく。皇太子が台湾に滞在したのは約 10 日間であった。

皇太子行啓にともなって、辜顕栄に勲三等瑞宝章、林熊徴に勲四等瑞宝章など、台湾名士に叙勲褒賞が行なれた。また、皇太子は帰途の「金剛」船上で台湾第二の高山「シルビア山」を「次高山」と命名した。いっぽう総督府では、「匪徒囚に対し特赦」も実施した。

緒方武蔵編『台湾大年表』（1938 年 12 月第 4 版、台北印刷株式会社）によれば、行啓の日程は次のとおりであった。

17 日　台湾神社参拝
　　台湾総督府、植物園内生産品展覧会、中央研究所農業部行啓
　　宿泊所（台湾総督官邸）

18 日　中央研究所、師範学校、同付属小学校、太平公学校、軍司令部、
　　高等法院、第一中学校内教育品展覧会、医学専門学校行啓
　　宿泊所（台湾総督官邸）での原住民舞踏鑑賞

19 日　新竹州庁、新竹尋常高等小学校、台中州庁、台中第一中学校行啓
　　宿泊所（台中知事官邸）で市民提灯行列、花火を観覧

20 日　台南州庁、孔子廟、台南師範学校、第一公学校、第一中学校行啓
宿泊所（台南知事官邸）で台湾武技、奏楽、提灯行列を観覧
21 日　安平、台湾製塩会社塩田、養殖試験場、
歩兵第二連隊営庭での閲兵、高雄州庁、第一尋常高等小学校行啓
高雄港内の巡覧、宿泊所（貴賓館）で提灯行列等を観覧
22 日　台湾製糖会社屏東製糖所行啓
高雄山（これを機に 29 日に「寿山」と改称）を登山
宿泊所（貴賓館）から湾内の松明行列等を観覧
23 日　お召し艦「金剛」で澎湖島へ、要港部行啓
基隆へ回航
24 日　基隆着
クルベー浜フランス戦没将士を弔い、築港工事巡覧、重砲兵大隊行啓
台北に帰還して博物館、円山運動場(全島学校連合大運動会)へ行啓
25 日　草山及び北投温泉に清遊、途中基隆河に数千羽の家鴨放飼を観覧
26 日　歩兵第一連隊営庭での閲兵、専売局、第一高等女学校、武徳殿、
第三高等女学校、円山運動場(陸上競技)へ行啓

関東大震災

1923 年 9 月 1 日、突如として関東大震災が起こった。台湾での報道は内地の新聞報道の転載が多かったが、台湾での関東大震災についての報道ぶりを知ることができる。

〈関東大震災については、よく知られていることなので解説を省略〉

台湾日日新報について

この時代、台湾での日刊紙は『台湾日日新報』(台北)、『台湾新聞』(台中)、『台南新報』(台南)、『東台湾新報』(花蓮港)の４紙だった。総督府の政策として、日刊新聞社の経営を保護するために地域販売制を実施していたのである。

なかでも『台湾日日新報』(1898 年 5 月 1 日創刊)は、台北市で発行が許可された唯一の日刊紙であるとともに、台湾の日刊紙では最大規模で、「総督府府報」「台北州報」「台北市報」も付録として発行し、そのために「御用新聞」と称された。

所蔵、制作、監修について

現在では『台湾日日新報』のマイクロフィルムは二種出ている。一つは台湾の台湾大学がかなり以前に制作したものだが、欠号も多く、撮影状態も良くない（印刷製本されたものは印刷状態が劣悪である)。もう一つは日本のゆまに書房が北海道大学所蔵分から制作したもので、撮影状態は台湾版よりも良好である。欠号等は台湾版で補っているが、それでも欠号があり、また状態の不完全な紙面もある。

この台湾新聞資料①1923（大正 12）年「昭和天皇皇太子時代の台湾訪問」「関東大震災」に収められた『台湾日日新報』はほんの一時期のものであって、必ずしも充分とは言えないが、その期間については前二種のマイクロフィルムでの欠号、欠面を約 20%補ったものになっている。

原紙は(財)台湾協会が所蔵している（主として向山寛夫氏寄贈）が、劣化が激しくとうてい一般の閲覧に供する事は出来ない状態であった。幸いにして、(財)交流協会が制作に関わってくださり、こうして閲覧が可能になった。両機関に感謝申し上げたい。なお、両機関の委託を受けて、河原功が監修に当たった。

収載した紙面は次のとおりである。

昭和天皇皇太子時代の台湾訪問

★　(既刊のマイクロフィルムに全部または一部未収録)

台湾日日新報

T12.3.25	8202 号	P1-8
T12.3.27	8204 号	P5-6(P1-4,7-10 欠)
T12.3.28	8205 号	P1-8
T12.3.29	8206 号	P1-2,9-10(P3-8 欠)　★
T12.3.30	8207 号	P1-8　★
T12.3.31	8208 号	P1-10
T12.4.1	8209 号	P1-8　★
T12.4.2	8210 号	P1-2,5-6(P3-4 欠)
T12.4.3	8211 号	P1-8
T12.4.4	8212 号	P1-6
T12.4.5	8213 号	P1-2,7-8(P3-6 欠)
T12.4.6	8214 号	P1-8
T12.4.7	8215 号	P1-2,7-8(P3-6 欠)
T12.4.8	8216 号	P1-10 ★
T12.4.10	8218 号	P1-8
T12.4.11	8219 号	P1-10
T12.4.12	8220 号	P1-2(一部),7-8(P3-6 欠)
T12.4.13	8221 号	P1-10
T12.4.14	8222 号	P1-2,7-8(P3-6 欠)
T12.4.15	8223 号	P1-8　★
T12.4.16	8224 号	P1-8,11-14(P9-10,15-16 欠)　★
T12.4.17	8225 号	P1-8
T12.4.18	8226 号	P1-10
T12.4.19	8227 号	P1-8　★
T12.4.20	8228 号	P1-10
T12.4.21	8229 号	P1-10
T12.4.22	8230 号	P1-8　★

T12.4.23	8231 号	P1-8
T12.4.24	8232 号	P1-12 ★
T12.4.25	8233 号	P1-8
T12.4.26	8234 号	P1-8
T12.4.27	8235 号	P1-12 ★
T12.4.28	8236 号	P1-8
T12.4.30	8238 号	P1-6
T12.8.27	8357 号	P3-4(P1-2,5-8 欠)

関東大震災

★ (既刊のマイクロフィルムに全部または一部未収録)

台湾日日新報

T12.9.2	8363 号	P1-8
T12.9.2	号外(片面)	2 枚
T12.9.4	8365 号	P1-8
T12.9.4	号外(片面)	1 枚
T12.9.5	8366 号	P1-8
T12.9.7	8368 号	P3-6(P1-2,7-8 欠)
T12.9.8	8369 号	P1-8
T12.9.9	8370 号	P1-8
T12.9.11	8372 号	P1-8
T12.9.12	8373 号	P1-8
T12.9.13	8374 号	P1-8
T12.9.14	8375 号	P1-8
T12.9.15	8376 号	P1-8
T12.9.16	8377 号	P1-8
T12.9.19	8380 号	P1-8
T12.9.20	8381 号	P1-8
T12.9.21	8382 号	P1-8
T12.9.22	8383 号	P1-8
T12.9.23	8384 号	P1-8
T12.9.24	8385 号	P1-6
T12.9.25	8386 号	P1-6
T12.9.26	8387 号	P1-8
T12.9.27	8388 号	P1-8
T12.9.30	8391 号	P1-8 ★

以上